

イタリア語における合成語の構造

—ハイフン語とその主要部—

上野 貴史

(大阪女子短期大学)

Sommario

In questo lavoro faccio ricerche sulla composizione del italiano, soprattutto la parola del trattino. Le parole-trattino in generale consistono nei due elementi; E_1 che è davanti al trattino e E_2 che è messo dietro al trattino. La composizione che ha il trattino si divide grosso modo in due gruppi; la parola derivata e la parola composta. La parola composta può suddividere in quattro; N-N, N-A, A-N, e A-A.

Analizzando la struttura della parola composizione del trattino e la testa, ho i risultati come segue;

A) la regola della testa relativa alle parole-trattino

- i) la testa della parola derivata è a destra del trattino
- ii) la testa della parola composta è a sinistra al livello della struttura base
- iii) la testa della parola composta che si fortemente unisce dai punti del significato e la forma è considerata come una parola

B) il costrutto delle parole-trattino

Considerando la categoria lessicale del E_1 come X e E_2 come Y, le parole-trattino appartengono a un costrutto qualsiasi;

- a) $[[E_1]_{A_1}-[E_2]_X]_X$
- b) $[[E_1]_X-[E_2]_Y]_X$

c) $[[E_1-E_2]_x]_x$

C) la relazione della parole-trattino e la testa;

costrutto	parole-trattino
$[[E_1]_{A\ r}-[E_2]_x]_x$	parola derivata
$[[E_1]_x-[E_2]_y]_x$	$\langle N-N \rangle \cdot \langle N-A \rangle$
$[[E_1-E_2]_x]_x$	$\langle A-N \rangle \cdot \langle A-A \rangle$

1. 序

イタリア語の合成語形成によって生成される語には、合成語の第一要素を $\langle E_1 \rangle$ 、第二要素を $\langle E_2 \rangle$ とすると、綴字上、(1)のような3種類の形態が存在する¹⁾。

- (1) a. $\langle E_1-E_2 \rangle$
- b. $\langle E_1\ E_2 \rangle$
- c. $\langle E_1E_2 \rangle$

この中でも(1a)のハイフンを用いた構造は、特に生成力が強く、多くの新しい造語を作り出す。基本的に、ハイフンは、2つ以上の語を一つのまとまった語として認識させるという機能を持つが、その結合の過程には、様々な操作が働いてると考えられる。また、ハイフン語は、その使用が定着していないその場限りの語も多く、一語として確立するまでの過渡期的な語形成であるともいえる。

このようなハイフン語²⁾について、本稿では、a) 各要素の語彙範疇と意味構造からの分類、b) ハイフン語の主要部の位置、c) 主要部と性・数の一致の関係、といったような点から分析を試みる。

2. ハイフン語の分類³⁾

イタリア語のハイフン語の多くは、2つの構成要素から成る<E₁-E₂>という構造をとる。この構成要素の自立の可否により派生形成と複合形成を区別する。

2.1. 派生語

派生の語形成は、一般的に語基に接頭辞・接尾辞などの接辞(Af)を付加して生成される。派生語は、通例、(1c)のようにハイフンを伴わず一語で綴られる。しかしながら、接頭辞の中には、語基とハイフンによって結合し、<接頭辞-語基>という形態をとるものがある。このような接頭辞は、生成力が強く、多くの新しい語を作り出している。ここでは、「語基の品詞」と「接頭辞の意味」により分析を行っている Seriani(1989)に倣い、派生ハイフン語を3つに分類する。

A) 「評価」を表す名詞・形容詞接頭辞⁴⁾

a-ideologico	「イデオロギー欠如の」
iper-realista	「超現実主義者」
mega-progetto	「巨大プロジェクト」
psico-fisico ⁵⁾	「精神物理学に関する」

non- は、英語から借用された外来語の接頭辞であるが、現代イタリア語においては、非常に生成能力のある接頭辞の一つとなっている。

non-aggressione	「不可侵」
non-violento	「非暴力(の)」
non-violenza	「非暴力」

B) 「場所・時間」を表す名詞・形容詞接頭辞⁶⁾

anti-atomo	「反核」
anti-Berlusconi	「反ベルルスコーニ」
anti-razzismo	「反民族主義」
ex-picchiatore	「元ボクサー」
ex-vice primo ministro	「前副首相」
extra-comunitario	「地域社会外（の）」
neo-comuista	「新共産主義者」
post-alfabetizzato	「読み書きを教えた後の」
post-comunista	「ポスト共産主義の」
post-ristorazione	「復興後」
radio-telefonia ⁷⁾	「無線電話」
trans-nazionale	「国家を越えて」
vetero-leninista	「旧レーニン主義の」
vice-presidente	「副大統領」
video-nastro ⁷⁾	「ビデオテープ」

接頭辞 *co-* は、本来、語基が母音で始まる語にのみ使用される *con-* の変異形である。しかし、現代イタリア語においては、*con-* と同じ意味を示す英語の接頭辞 *co-* が普及し、特に新しい語を形成するハイフン語においては、*con-* の使用はほとんど見られない。

co-fondazione	「共同基金」
co-presidenza	「議長兼任」

C) 動詞接頭辞

ri-rispingliare

「また脱がせる」

2.2. 複合語

複合形成については、 $\langle E_1 \rangle$ と $\langle E_2 \rangle$ の語彙範疇に関して分類を行う。ハイフン語の構成要素となる語彙範疇には、名詞(N)と形容詞(A)があり⁸⁾、 $\langle N-N \rangle$, $\langle N-A \rangle$, $\langle A-N \rangle$, $\langle A-A \rangle$ の4つの結合が出現する。これらの複合語におけるそれぞれの要素は、修飾(Modifier: MR)・被修飾(Modified: MD)といった従属関係か、同等の要素を並置する等位関係にある。

2.2.1. $\langle N-N \rangle$ ⁹⁾2.2.1.1. 従属構造 $\langle MD-MR \rangle$

$\langle N+N \rangle$ の複合語は、英語では $\langle MR+MD \rangle$ の順序で現れるが、イタリア語では $\langle MD+MR \rangle$ の順序が一般的である^{10) 11)}。ハイフン語 $\langle N-N \rangle$ においてもこれと同様、イタリア語では $\langle MD-MR \rangle$ の構造をとる。これらのハイフン語の生成過程には、多種の削除変形が行われており、生成されたハイフン語の $\langle E_1 \rangle$ と $\langle E_2 \rangle$ の意味関係を複雑にしている。本稿では、この削除されている部分の意味から、「類似性」「同一性」「特定化」「総称」の4つに分類する。

A) 類似性

$\langle E_2 \rangle$ は、 $\langle E_1 \rangle$ の「類似性」を表し、 $\langle E_1 \text{ come } E_2 \rangle$ 「 E_2 のような E_1 」という意味構造を示す。

abito-coccinella

(← *abito come coccinella*)

「テントウムシのようなドレス」

cane-lupo

「シェパード犬」

chiusura-lampo

「ファスナー」

parola-chiave

「キーワード」

punto-chiave	「キーポイント」
Stato-fantoccio	「傀儡政府」

B) 同一性

〈E₂〉は、〈E₁〉の「同一物」を表し、〈E₁ *che è* E₂〉「E₂であるE₁」という意味構造を示す。

cittadino-elettore	(← cittadino <i>che è</i> l'elettore)	「有権者である市民」
giornalista-scrittore		「作家でもあるジャーナリスト」
lettore-elettore		「有権者である読者」
zingaro-acrobata		「曲芸士であるジプシー」

C) 特定化

〈E₂〉は、〈E₁〉を「特定化」する働きを持ち、〈E₁ *per (di)* E₂〉「E₂の(ための)E₁」という意味構造を示す。

messaggio-radio	(← messaggio <i>per</i> radio)	「ラジオメッセージ」
ala-centro		「中道」
casa-rifugio		「隠れ家」
centro-studi		「研究センター」
cinema-verità		「ドキュメント映画」
busta-paga		「給料袋」
film-tivù		「テレビ映画」
libro-omaggio		「寄贈本」
livello-prezzi		「価格の水準」
operazione-silenzio		「沈黙作戦」

programma-scuola	「教育番組」
sala-parto	「分娩室」
treno-navetta	「短距離定期往復列車」

D) 総称

〈E₂〉が〈E₁〉の「総称」として出現し、〈E₁ con E₂〉「E₂のあるE₁」という意味関係を持つ。

chiesa-museo	(← chiesa con il museo) 「美術館のある教会」
città-giardino	「田園都市」
quartiere-fortilizio	「アジトのある界限」

2.2.1.2. 等位構造

等位構造は、A) 〈E₁ e (o) E₂〉「E₁と（または）E₂」と、B) 〈da E₁ a E₂〉「E₁からE₂」という2種類の意味構造に区分される。また、〈E₁〉と〈E₂〉には、同じカテゴリーに属する語が並置される。

A) 〈E₁ e (o) E₂〉

alleato-avversario	「同盟国と敵国」
amico-nemico	「敵味方」
artista-matematico	「芸術家と数学者」
Berlusconi-Hitler	「ベルルスコーニとヒットラー」
contadino-operaio	「農民と労働者」
decreto-legge	「法令・法律」
destra-sinistra	「左派と右派」
odio-amore	「好き嫌い」

sud-ovest

「南西」

visitatore-pellegrino

「訪問者や巡礼者」

B) <da E₁ a E₂>

giugno-agosto

「6月から8月」

primavera-estate

「春から夏」

Quattrocento-Cinquecento

「15、6世紀」

等位構造の<N-N>ハイフン語の中には、形容詞のような働きをするものがある。

(2) la questione *fascismo-antifascismo*

「ファシズム対反ファシズムの問題」

(3) il rapporto *qualità-prezzo*

「質と価格の関係」

これらは、ハイフン語ととそれに前置されている名詞との性の一致がないことから、前置詞 *di* の削除変形を被っていると分析できる¹²⁾。

(2') la questione *di* *fascismo-antifascismo*(3') il rapporto *di* *qualità-prezzo*

2.2.2. <N-A>

<N-A>は、<E₂>に現在分詞形をとり、<<MR-MD>>の意味構造で現れる。

cee-dipendente

「ヨーロッパ経済共同体に依存した」

2.2.3. <A-N>

<A-N>は、すべて<<MR-MD>>の構造をとる。

amante-oggetto	「愛する対象」
Est-Europa	「東ヨーロッパ」
nazionale-populista ¹³⁾	「国家人民主義者」
piccolo-borghese	「小市民」
social-gollismo	「社会ドゴール主義」

2.2.4. <A-A>

2.2.4.1. 従属構造<<MD-MR>>

cultural-mondano	「上流社会の文化の」
politico-parlamentare	「議会政治の」
teorico-filosofico	「哲学理論の」

2.2.4.2. 従属構造<<MR-MD>>

militare-industriale	「軍事産業の」
politico-istituzionale	「政治制度の」
scientifico-investigativo	「科学調査の」

2.2.4.3. 等位構造

<A-A>の等位構造は、<N-N>ハイフン語と同様、A) <E₁ e (o) E₂>、B) <da E₁ a E₂>の2種類の意味構造を持つ。

A) <E₁ e (o) E₂>

cultural-educativo	「文化的・教育的な」
grigio-verde	「灰緑色の」
politico-culturale	「政治・文化の」

politico-sociale	「政治・社会の」
privato-pubblico	「公私の」
terroristico-mafioso	「テロリスト・マフィアの」

B) <da E₁ a E₂>

etrusco-laziale	「エトルリア・ラツィオの」
medio-alto	「中から上の」
medio-basso	「中下層の」

2.3. 3要素以上の構造

3要素以上のハイフン語には、A)文の一部をハイフンでつないだものと、B)等位の構造を持つものに分類できる。

A) 文の一部

fai-da-te	<N-P ¹⁴⁾ -N>	「素人仕事」
film-con-bambino	<N-P-N>	「子供が出演している映画」
pronti-a-tradire	<A-P-V ¹⁵⁾ >	「裏切る準備が出来た」

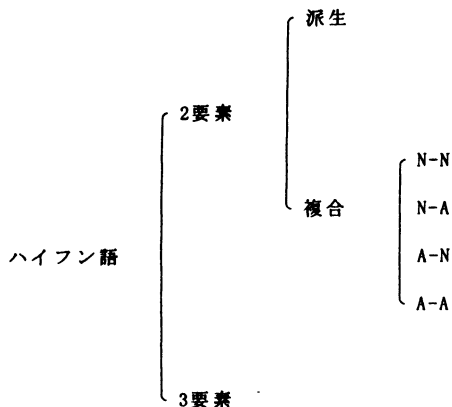
B) 等位構造

presidente-padre-padrone	<N-N-N>	「大統領・父・主人」
regista-scenografa-costumista	<N-N-N>	「演出・舞台・衣装係」
uomo-impresa-politica	<N-N-N>	「人間・事業・政治」

3. ハイフン語の主要部

2.で行ったハイフン語の分類をまとめると、(4)のようになる。

(4)



この分類は、主に各要素の語彙範疇と要素間の意味構造という観点から行っている。特に2要素から成るハイフン語におけるこの分類は、合成語全体の決定要素の相違とも関連している。そこでここでは、「合成語全体の範疇を決定する要素」¹⁶⁾であるとされる主要部¹⁷⁾について、イタリア語ハイフン語には、(5)のような規則があることを検証していく。

(5) i) ハイフン派生語の主要部は、右側の要素<E₂>である。

ii) ハイフン複合語の主要部は、基底構造における左側の要素である。

iii) ハイフン複合語において、各要素の結びつきが強い場合、一語として扱われる。

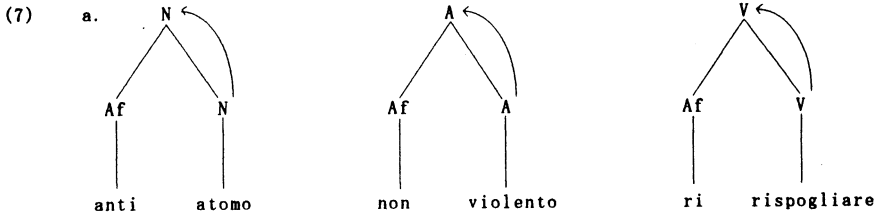
3.1. 語彙範疇と主要部

3.1.1 派生語

まず、派生語の(6)の例を考察する。

- (6) a. anti-atomo
 b. non-violento
 c. ri-rispiogliare

これらの統語構造を示すと、(7)のようになる。



(7)で示したように、派生語の品詞は、右側の要素である<E₂>の語彙範疇によって決定されている。つまり、ハイフン派生語の主要部は右側の要素であるといえる。これを一般化するために、任意の語彙範疇を X とすると、ハイフン派生語は、(8) のように記述できる。

$$(8) \quad [[E_1]_{Af} - [E_2]_X]_X$$

3.1.2. 複合語

ハイフン複合語の<N-N>と<A-A>は、<E₁>と<E₂>の語彙範疇が同じであるので、ここでは、<N-A>と<A-N>について考察する。

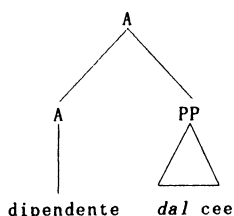
3.1.2.1. <N-A>

<N-A>は、(5)の規則を表層で違反している。

$$(9) \quad [[cee]_N - [dipendente]_A]_A$$

しかし、(9)は、(10)の統語構造を持つ形容詞句(AP)から移動¹⁸⁾と削除の変形を被って生成されている。

(10)



(9)の基底構造となる(10)は、主要部が左側にあり、(9)は、変形を受ける前に主要部が決定されて生成されていると考えられる。従って、主要部が決定される段階の統語構造は、(11)のようになり、主要部が基底構造における左側の要素となっている。

(11) $[[dipendete]_A [dal\ cee]_{PP}]_{AP}$

3.1.2.2. <A-N>

次に、<A-N>の構造を考えてみる。これを上記の構造と同じように記述すると(12)のようになる。

(12) $[[social]_A [gollismo]_N]_N$

(12)は、表面上右側の要素と語彙範疇が一致しているが、<A-N>構造のハイフン語は、<E₁>の要素と<E₂>の要素の結びつきが意味的・形態的¹⁹⁾に強く、(12)を(13)のような構造に書き換える必要がある。

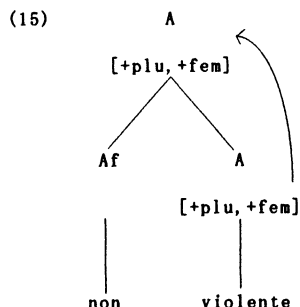
(13) $[[social-gollismo]_N]_N$

よって、<A-N>は、左側の要素と複合語の語彙範疇が一致しているのではなく、ハイフン語が一つの語のように扱われ、ハイフン語全体と一致しているのである。

3.2. 性・数の一致と主要部

主要部は、3.1.で考察したように語彙範疇を決定する要素であるが、同時にイタリア語では、性や数などの一致が起こる要素でもある。性と数の素性を $[-\text{plu}]$ (単数)、 $[\text{+plu}]$ (複数)、 $[-\text{fem}]$ (男性)、 $[\text{+fem}]$ (女性) と表示すると、(14)のハイフン派生語は、(15)のような構造を持ち、主要部の素性がハイフン語全体の素性と一致していることがわかる。

(14) non-violente



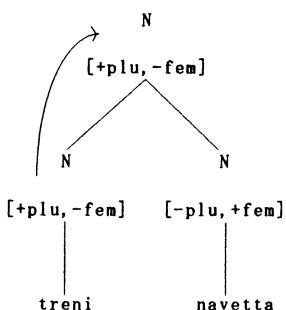
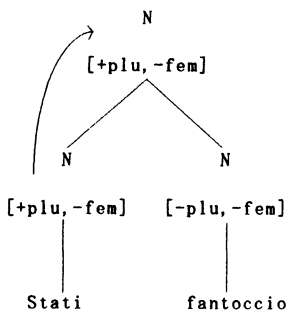
そこで、ここでは、 $\langle E_1 \rangle$ と $\langle E_2 \rangle$ の語彙範疇が同じである $\langle N-N \rangle$ と $\langle A-A \rangle$ のハイフン複合語の主要部を性・数の一致という点から検証していく。

3.2.1. $\langle N-N \rangle$

$\langle N-N \rangle$ のハイフン語には、 $\langle \langle MD-MR \rangle \rangle$ の修飾構造と等位構造をとるものがある。まず、 $\langle \langle MD-MR \rangle \rangle$ の次の構造を考えてみる。

(16) a. Stati-fantoccio

b. treni-navetta



これらの形成されたハイフン語の性・数は、左側の要素と一致しており、左側の要素が主要部となっている²⁰⁾。従って、〈N-N〉の〈MD-MR〉の構造は、(17)のように記述できる。

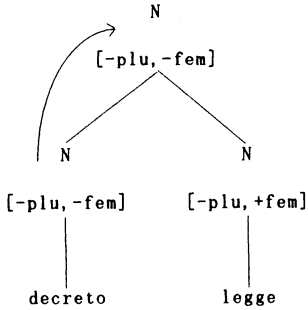
- (17) a. $[[\text{Stati}]_N - [\text{fantoccio}]_N]_N$
 b. $[[\text{treni}]_N - [\text{navetta}]_N]_N$

等位構造を持つ〈N-N〉ハイフン語は、同じカテゴリーに属する語を並置するという性格から、〈E₁〉と〈E₂〉の両方に性・数の屈折変化が起こる。

(18) artista-matematico → artisti-matematici

しかし、〈E₁〉と〈E₂〉の性が異なる場合、ハイフン語は左の要素の性に一致する。

(19) decreto-legge



よって、〈N-N〉の等位構造においても左側の要素が主要部であると言える。

ここで、これらの〈N-N〉のハイフン語の構造を一般化すると、(20)のようになる。

(20) $[[E_1]_N - [E_2]_N]_N$

3.2.2. 〈A-A〉

形容詞を伴うハイフン語は、いずれも〈E₁〉と〈E₂〉の結合が強く、〈N-N〉とは異なり、一語としての性格を持つ。まず、〈〈MD-MR〉〉の構造を持つ(21)について考えてみる。

(21) politico-parlamentare

(21)は、ハイフンを伴わない(22)のような名詞句(NP)から派生している。

(22) $[[politica]_N [parlamentare]_A]_{NP}$

(22)の名詞句が、一語の複合形容詞になるために、*politica* が形容詞に派生し、同時にハイフンが付加されて(23)のような構造ができる。

(23) [[politico-parlamentare]_A]_A

<MR-MD>の構造については、(24)のハイフン語を例に挙げる。

(24) scientifico-investigativo

(24)の<A-A>ハイフン語は、(25)のような<A-N>ハイフン語から形容詞に派生しているものである²¹⁾。

(25) [[scientifico-investigazione]_N]_N

(25)の<A-N>の名詞複合語が形容詞複合語になると、(26)のような構造を取る。

(26) [[scientifico-investigativo]_A]_A

これらの<MD-MR>と<MR-MD>の<A-A>複合語は、それぞれ異なる意味構造から派生しているが、合成語全体の構造はどちらも(27)のようになる。

(27) [[E₁-E₂]_A]_A

よって、性・数の一致は、ハイフン語内部の<E₂>の要素にだけ現れる。

(28) politico-parlamentari
scientifico-investigativi

最後に、等位構造のものについて考察してみる。<A-A>の等位構造は、<N-N>のそれとは異なり、性・数の一致は<E₂>の要素に起こる。

(29) *situazioni politico-sociali*

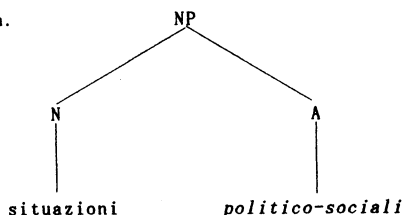
「政治・社会の状況」

この等位構造における〈A-A〉と〈N-N〉の違いを説明するために、(30)の〈N-N〉のハイフン語を含む名詞句と(29)の統語構造を比較する。

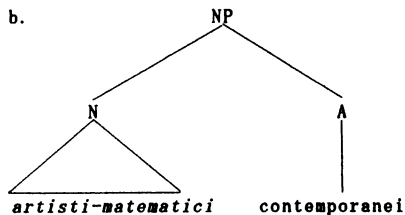
(30) *artisti-matematici contemporanei*

「現代の芸術家・数学者」

(31) a.



b.



ハイフン語を含む名詞句において、〈N-N〉の複合語のハイフン語は主要部（左側）、〈A-A〉の構造のハイフン語は非主要部（右側）の位置に置かれる。よって、〈A-A〉の複合語の性・数の一致は、〈E₂〉の要素にだけ起こり、統語構造は、(32)のようになる。

(32) $[[E_1-E_2]_A]_A$

4. 結語

本稿では、イタリア語の語形成に関する研究として、ハイフン語を扱った。これらの考察により、以下のことが指摘できる。

① <ハイフン語の主要部規則>

- i) ハイフン派生語は、右側が主要部である。
- ii) ハイフン複合語は、基底構造における左側が主要部である。
- iii) 意味的・形態的に要素間の結びつきが強いハイフン複合語は、一語として扱われる。

② <ハイフン語の構造>

ハイフン語は、 $\langle E_1 \rangle$ の語彙範疇をX、 $\langle E_2 \rangle$ の語彙範疇をYとすると、次の3ついずれかの構造を持つ。

$$a) \quad [[E_1]_{A \neq} - [E_2]_x]_x$$

$$b) \quad [[E_1]_x - [E_2]_y]_x$$

$$c) \quad [[E_1 - E_2]_x]_x$$

③ ハイフン語とその主要部の関係は、次の表のようになる。

構造	ハイフン語
$[[E_1]_{A \neq} - [E_2]_x]_x$	派生語
$[[E_1]_x - [E_2]_y]_x$	$\langle N-N \rangle \cdot \langle N-A \rangle$
$[[E_1 - E_2]_x]_x$	$\langle A-N \rangle \cdot \langle A-A \rangle$

英語や日本語などの合成語は、一般的に、右側主要部の規則が適応されるが、ハイフン語に関する限り、イタリア語の合成語は、派生語のみが右側主要部の規則に従う。複合語に関しては、概ね、左側が主要部である。このことは、名詞句において形容詞が名詞を修飾する構造と深く関係していると考えられ、語形成と統語論の接触する興味深いものの一つとなっている。

註

¹⁾ これらの3種類のすべての形態で出現する複合語もある。

a. pesce-cane

「サメ」

b. pesce cane

c. pescecane

²⁾ 本稿で扱ったハイフン語のデータは、主に以下のものから収集した。

Panorama No. 8-18. 1994.

Epoca No. 11. 1995

L'Espresso No. 12. 1995.

Forconi, Augusta. 1990. *Dizionario delle Nuove Parole Italiane*. Sugarco Edizioni.

Cortelazzo, M. & Ugo Cardinale. 1989. *Dizionario di Parole Nuove 1964-1987*. Loescher Editore.

- 3) イタリア語のハイフンの使用は、ここで分類されるもの以外に a)一つの語を音節に区切る場合、b)地名や人名など、要素を分割できない場合、c)英語などからの借用語、がある。

a) de-ci-sa-mente 「決・定・的・に」

(*Panorama* No. 18. 1994)

b) Friuli-Venezia Giulia 「フリウリ・ヴェネツィア・ジュリア地方」

c) top-model 「トップモデル」

(*Epoca* No. 11. 1995)

- 4) このグループに属する接頭辞は、この他にも、*maxi-*, *super-* などがある。
- 5) *psico-* は、一般的に、接頭辞ではなく語基の前に付加される造語要素として扱われるが、単独で自立できないという理由から派生語に含める。
- 6) このグループに属する接頭辞は、この他にも、*contro-* などがある。
- 7) *radio-* や *video-* は、自立して使用される語であるが、ここで挙げたハイフン語は、造語要素として語基に付加し、接頭辞に近い働きをしているため、派生語として分類した。
- 8) 名詞・形容詞以外の語彙範疇のハイフン語には、次のようなものがある。

senza-casa <P-N> 「ホームレス」

militare-strettamente <A-ADV (副詞)> 「厳密に軍隊の」

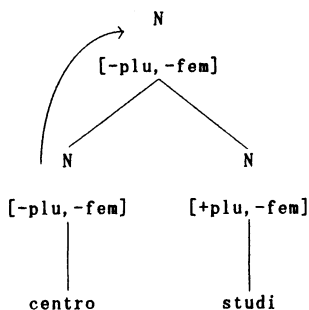
- 9) Sugeta(1989)では、<N+N>の名詞複合語を意味と機能の観点から7つに分類している。

- 10) このことは、英語の名詞句の構造が<A+N>であるのに対し、イタリア語は<N+A>という語順をとることと関係していると考えられる。

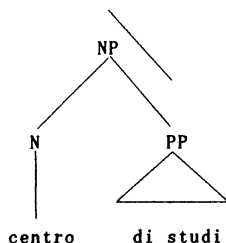
英語 social creature <A+N>

イタリア語 animale sociale <N+A>

- ¹¹⁾ Sugeta(1989;197)は、固有名詞が<<MD>>になる場合は、<<MR-MD>>の順序になると述べている。"l'ordine è inverso, particolarmente quando DO (determinato) è un nome proprio"
- ¹²⁾ これらの名詞句には、ハイフン語形成と同様の削除変形があると考えられる。つまり、ハイフン語を一語の名詞とすると、(2)や(3)は<N+N>の構造をとることになり、意味関係から本論の2.2.1.1.(c)のような削除変形が行われていると考えられる。
- ¹³⁾ 語尾切断現象は、<A-N>、<A-A>の<E₁>の位置にくる形容詞にしばしば起こる。このことは、これらのハイフン語における各要素の密接度が高いことと関係していると思われる。上野(1993)参照。
- ¹⁴⁾ 前置詞の語彙範疇を指す。
- ¹⁵⁾ 動詞の語彙範疇を指す。
- ¹⁶⁾ Williams(1981)参照。
- ¹⁷⁾ 主要部は、意味の中心である<<MD>>とは、必ずしも一致しない。
- ¹⁸⁾ <N-A>の<A>は、動詞から派生した現在分詞形である。このように、動詞派生語が主要部となる場合、移動の変形があると考えられる。
- ¹⁹⁾ 結びつきの強さは、これらのハイフン語の<E₁>の要素に、頻繁に語尾切断が起こることからも了解できる。
- ²⁰⁾ この構造をとるもののなかに、*centro-studi*のように、右側の要素が屈折変化しているように見えるハイフン語がいくつかある。しかし、これらのハイフン語の性・数は左側の要素と一致している。



これらは、ハイフン語の生成において前置詞の *di* などの削除があることの証拠となる。



²¹⁾ 本論3.2.3. 参照。

参考文献

- Ceppellini, Vincenzo. 1990. *Dizionario Grammaticale*. De Agostini.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』. ひつじ書房.
- Lepschy, A. & G. Lepschy. 1986. *La Lingua Italiana*. Bompiani.
- 竝木崇康. 1985. 『新英文法選書2 語形成』. 大修館書店.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, & J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Scalise, Sergio. 1988. *The Notion of "Head" in Morphology*. in G. Booij & J. Marle (eds.). *Yearbook of Morphology*. Foris Publications. 229-245.

- Serianni, Luca. 1989. *Grammatica Italiana: Italiana comune e lingua letteraria*. UTET.
- Sugeta, Shigeaki. 1989. *Il Sintagma Nominale del Tipo <<parola-chiave>> in Italiano e nelle Lingue Romanze*. Società di Linguistica Italiana 27. 195-212.
- 上野貴史. 1993a. 『イタリア語の語尾切断現象(2)』. 大阪女子短期大学紀要第18号. 51-59.
- . 1993b. 『イタリア語における切断現象と使用頻度』. ニダバ(西日本言語学会編)第22号. 103-111.
- Williams, Edwin. 1981. *On the Notions "Lexically Related" and "Head of a Word"*. Linguistic Inquiry 12-2. 245-274.